



Title	集古の伝統 尚古系譜 : 日本歴史考古学の近代
Author(s)	中井, 淳史
Citation	日本語・日本文化. 2005, 31, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12453
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究論文>

集古の伝統 尚古の系譜

—日本歴史考古学の近代—

中井 淳史

はじめに—「古物学」から「考古学」へ

明治 6 (1873) 年、文部省は『百科全書』と呼ばれる叢書を刊行した。この叢書は西洋の学問・技術の概説的著作を翻訳したもので、とりあげられたテーマは地質学・物理学・化学といった理学から、建築学・蒸気機・家畜などの農工業技術、さらに言語・人種・人心論・経済といった人文社会科学に至るまで多岐にわたっていた。

この叢書の一冊として、明治 10 (1877) 年に刊行されたのが『古物学』である。渡辺兼庸の書誌学的検討によれば、これはチャンバース兄弟 William and Robert Chambers が編んだ “Chambers' Information for the People” (第 4 版、1856・1858) 所収の “Archaeology” を、薬学者の柴田承桂が翻訳したものである [渡辺 1977]。

この書物の冒頭では、「古物学」の定義が語られている。「往昔ノ遺跡遺物ニ憑拠シテ、上古ノ沿革史記ヲ演繹スル所ノ学科」(p.1) がそれである。そして、過去を知る欲求とは人類に普遍なものと述べ、このあたらしい学問のもつ「古さ」と重要性が強調されるのである。もっとも、エジプトやアッシリア、インドからはじまって、イギリス、アメリカの古事物へと至る構成をみれば、この書物が叢書に加えられた目的が、古物学 Archaeology なる学問の導入のためというよりはむしろ、欧米の歴史を学ぶためであったと容易に想像できる。その意図はさておき、この「古物学」なる枠組みによって、「往昔ノ遺跡遺物」、すなわち古きモノは学問的対象としての地位を獲得したのであった¹⁾。

日本考古学史では、この『古物学』の刊行、同年にはじまった E.S. モースによる大森貝塚の発掘、そして明治 17 (1884) 年の東京人類学会の設立に至る過程を、

近代科学たる考古学の成立のエポックと評価してきた〔角田 1954、齋藤 1974 など〕。たしかに、過去の探求という知的欲求が、西洋近代知の導入を契機に科学としての自己像を得るに至ったことは事実である。しかしながら、そもそも古きモノへの興味関心は、考古学なる学問の成立によってはじめて出現したわけではない。一方で学史に関する著作の多くが紹介するように、遅くとも江戸時代には広範な階層のあいだで展開していた〔清野 1954・1955、齋藤 1974 など〕。にもかかわらず、このような動向は科学の発展というコンテキストのなかで、「非科学的で神話的な趣味」という評価を与えられ〔勅使河原 1995 など〕、前史として近代考古学の制度外へと追いやられたのであった。いわば、日本考古学史では近世と近代の断絶が強調されてきたのであった。

この断絶とは、はたして自明のものなのであろうか。本稿では、明治 29 (1896) 年から昭和 19 (1944) 年までのほぼ 50 年近くにわたって活動を続けたある会をとりあげて考えてみたい。集古会と呼ばれたこの会には、考古学者のみならず市井の趣味人や収集家に至るさまざまな立場の人々が集まり、古きモノにまつわる多様な談義をくりひろげていた。この集古会の歴史やその目的、そして活動内容の検討を通じて、これと『古物学』の導入を機に成立した近代考古学との距離関係を検証する。

1. もうひとつの「考古学派」・集古会

1.1 集古会の創立と目的

黎明期の考古学者・八木奘三郎は、明治期の考古学には「博物館派」と「大学派」の二大潮流があったと回顧している〔八木 1935〕。前者は帝室博物館（現在の東京国立博物館）に籍をおいた研究者で、後者は坪井正五郎が設立した東京人類学会の系譜に連なる研究者である²⁾。八木の指摘は、現代の学史的認識からみてもうなづけるが、一方で彼は「一別派」として、集古会の活動をあげていた。

集古会は、明治 29 年 1 月 5 日に集古懇話会という名で、上野公園韻松亭にて最初の会合を開いた³⁾。のちに定期的に刊行された『集古会誌』にその経緯が述べられている（同年 11 月 20 日号）。発起人となったのは佐藤伝蔵・大野延太郎（雲外）・八木・林若吉・田中正太郎の 5 人で、いずれも坪井の主宰する帝国大学理科

大学人類学教室の成員であった⁴⁾。

会の目的は、「凡ての古器物を集めて彼我打ち解け話し合う…汎く世の同行者を会し各自所有の古物を携帯して互に品評を下し傍ら経験を語り考説を述べ以て談笑の間に智識を交換する」(同号) ことにあった⁵⁾ (以下、引用文は新字・新かなづかいに改めた)。参加者間の懇談や意見交換をことさらに重視したのは、東京人類学会や、明治28(1895)年4月に設立された考古学会が「固た苦しき学会の為め、会員間の親しみが薄く、且つ講演が終われば直に散会すると曰う訳で、傍聴者が充分に質問を試み、或は自己の所見を申述る暇がない」ことに不満だったからという [ibid.:18]。講演を主体とするスタイルとは欧米の学会の模倣にほかないが、彼らはそれよりも実際にモノを持ち寄り、「茶を飲み、菓子を食しながら、樂みの中に存分各自の意見を語る」場を渴望したのであった [ibid.:18]。

例会は隔月(奇数月)に開催され、多くは土曜日午後があてられた。神田青柳亭や上野韻松亭といった貸席・料亭が会場であった。この点をみても、娯楽的要素をいかに重視していたかがわかる。とはいえ展示は本格的で、展示台を料亭に預け、展示用のガラスケースや下敷き用の毛氈まで用意していたという(三村清三郎「集古会昔話」、昭和17〔1942〕年第2号)。

集古会の初会合への参加者は21名を数えた。その顔ぶれをみると、坪井正五郎と彼の弟子たちをはじめ、歴史学者の三宅米吉、国学者の黒川真道、牧師で民俗学研究家であった山中笑(共古)、歴史・民俗の研究家であった阿部正功(子爵、旧棚倉藩主)など、専門領域や立場はさまざまであった⁶⁾。当初は人類学教室の人脈に連なる研究者が大半であったが、やがて顔ぶれは変化した。そのきっかけとなったのは、玩具人形の収集家であった清水仁兵衛(晴風)の参加だったようだ。明治31(1898)年9月25日開催の第17回は、晴風の紹介で元禄古物の収集家が大量に入会したことを祝して企画され、「会する者多くして甚だ雑踏」するほどであったという(明治32〔1899〕年6月16日号)。晴風の人脈によって、近代科学の研究者というカテゴリに含まれない収集家・愛好家といった人々が集古会に加わったのである。大学人にとどまらず、市井の好古家が多く集ったのがこの会の特色であった⁷⁾。八木は当時の盛況を以下のように語っている。

全体の会員が官民の集合で、就中民間人士としては、前条の如く、質屋あり、太物屋あり、車屋あり、役者あり、焼芋屋あり、新聞記者あり、探偵あり、本屋あり、古物屋あり、茶人あり、俳諧師あり、百姓ありと曰ふ有様で、又老荘、尊卑、貧富の區別や、態度はみじんもなく、単に趣味に拠て集り、興に乗じて語るのでありますから、和気藹々として宛も瑞氣の満るが如く、其賑かなることは一見浅草の仲店に類し、洵に欲界や、利益を忘れる小兒遊びの様な感じが致しました〔八木 1935:20〕。

かくして、人類学者の懇話会として出発した集古会は、創立ほどなくして好古家、すなわち古器物の愛好・収集家も含めた大きなサークルへと変化したのであった⁸⁾。

以上みてきたように、参加者がモノを持ち寄って自由に意見交換することが、集古会のスタイルであった。これは決して当時において斬新なものではない。すでに江戸時代には成立していた伝統的なスタイルであった。18世紀末ごろから19世紀初頭にかけて、京都では奇石会や以文会なる集まりが開催されていたし、江戸では文人たちを中心に耽奇会という名の集まりがあった〔清野 1954など〕。奇石の品評（奇石会）や典籍・文物の考証（以文会、耽奇会）というように、その目的こそさまざまであるが、いずれも階層や学問領域の別なく人々が意見を交換する開放性や、実物資料の見聞を重視する点は共通していた〔表 1997〕。これらと比較すれば、集古会のスタイルが江戸時代の知的伝統から一步も抜け出たものではなかったことは一目瞭然である。それどころか、近代科学の導入によって生まれたはずの職業的研究者—非研究者という区分すら、旧来の伝統に飲み込まれてしまったということができるかもしれない。

その意味で、集古会の目的には近世的な「古さ」を抱えていたともいえる。にもかかわらず、八木は「人類学会や、考古学会が、厳然たる衣冠束縛の人物とすれば、集古会は宛も家庭内の主人公が横になりながら女房や、子供と楽し気に語る、裏面の状態でありますから、矢張り考古界全体上より観察して、大に必要な会合と申されねばなりません」と述べ〔ibid.:20〕、集古会を考古学史上高く評価した。その背景には、自身や人類学教室の同志が創立に関与した経緯もあっただろ

うが、それをわりびいて考えても、八木の発言は注目に値する。では、集古会が考古学界に与えた影響、いいかえれば集古会という集まりの革新性とは、いったいどこにあったのだろうか。つぎに活動内容をくわしく検討してみたい。

1.2 集古会の活動と組織

集古会の活動の基本となっていたのは、例会の開催と会誌の刊行であった。例会は明治29年1月の第1回を皮切りに、年5回（1・3・5・9・11月）開催された。当初は参加者の所蔵する石器や土器、金属器などの考古資料を持ち寄っていたが、やがて「種切れと為り、又斯る類では厭きが来るので、今度は千社札が出る、玩弄人形が出る、御守りが出る、中には菓子の袋類まで出る様にな」った〔八木1935:19〕。清水晴風ら好古家が多く参加するようになった明治31年11月の第18回以後、あらかじめ題を設定して、それにちなんだ器物を持ち寄る方式へと変わった。発足当初は石器や土器、金属器などの考古資料（採集品）が多かったが、やがて古器物全般が対象となっていました。題の設定とは、会としてのまとまりやテーマ性の追究がつよくなつたことのあらわれであるが、同時に娯楽的な要素がより色濃くなった結果ともいえる。

このような例会運営の変化と軌を一にするかのように、会の組織も整備された。明治30年9月の第11回で会費制度の導入が決められ、第12回（同年11月）では、発起人であった大野・林・八木の3名が幹事に選任された。会規は創立当初から定められていたが、明治32年7月の第22回で大きく改正され、名誉会員・賛助会員・通常会員のなかから、会長や幹事を選出する制度が整えられた。初代の会長となったのは、埼玉県県会議長や貴族院議員を歴任し、郷土史家としても知られた根岸武香であった⁹。このように会員・役員の制度を設けて運営するスタイルは、江戸時代にはみられない近代的な特徴といえる。

集古会のもうひとつの革新性は、会誌の定期的な刊行にあった（第1図）。これは例会の出席会員に頒布した出品目録がはじまりであった。明治29年11月に『集古誌』として発行された会誌は、『集古会誌』（明治32年6月まで）→『集古会記事』（明治33〔1900〕年12月～明治35〔1902〕年11月）→『集古会誌』（明治36〔1903〕年3月～大正5〔1916〕年7月）→『集古』（大正9〔1920〕年2月以

降）と、何度か誌名を変えながら会が解散する昭和19年まで存続した（以下、会誌の名称は『集古』に統一する）。当初は出席会員から会費を集めて頒布していたが、会費制度の整備とともに全員に配布するようになった。50年におよぶ会誌の刊行も大変な事業であるが、ここではそれ以上に例会をその場の愉楽として終わらせてしまうではなく、その成果を記録し、江湖に発信することが明確に意識されていたことを重視しておきたい。メディアの有無という時代的相違はあるとはいえ、このような開かれた姿勢もまた、江戸時代の好古家たちの活動とは大きく異なる特徴である。

具体的な内容については次章で吟味するが、会誌には例会の出品目録のみならず、会員による論説やエッセイが図入りで掲載され、また業務連絡や会計報告、総目録も掲載されるなど、その構成は現代の学会誌とほとんど変わらなかった。この点も集古会の革新性として指摘できよう。

1.3 「集古会」の終焉

大正5年8月から9年1月にかけて、『集古』の刊行は経済的な事情から一時途絶するものの¹⁰⁾、例会は通常通りおこなわれ、また会員数も順調に増加していく。大正11（1922）年10月作成の名簿には賛助会員16名、在京会員142名、地方会員117名の計275名が掲載されている（同年10月25日号）。第200回例会を記念してつくられた『千里相識』（昭和10〔1935〕年9月15日刊）には、賛助会員6名、在京会員99名、地方会員147名の計252名がみえる。在京会員が減少したのは関東大震災の影響もあっただろうが、注目されるのは地方会員の増加である。例会は一貫して東京で開催されていたが、その成果を誌面で読むことをのぞむ会員の輪は着実にひろがっていったのであった¹¹⁾。『千里相識』には、和田千吉・柴田常恵・関保之助といった考古学者や、民俗学者の柳田国男、国語学者の橋本進吉や新村出、歌人・国文学者の佐々木信綱や作家の永井荷風の名がみえる。



第1図 『集古会誌』表紙
(明治29年11月20日号)

考古学・人類学者の名はやや少なくなったものの、研究者から好古家まで多彩な人々が名を連ねている状況に変化はない。プロやアマチュアの別なく集い、自由に談義するという近世的な志向に立脚していた集古会は、近代科学の定着によって衰退するどころか、逆に根をはりつづけていたのである。

このような集古会もしかし、時局にうちかつことはできなかった。全体主義の台頭で個人の自由が厳しく制限されるなかで、活動もいつしか閉塞していったのである。戦時中も隔月開催というペースはおおむね守られていたが、とうとう昭和18（1943）年11月の例会で会の休止が議題にのぼるようになった。その最大の理由は、経済統制が強化されたために用紙や印刷所の確保が困難となったからであった。会誌を一枚刷の資料に代えて存続をはかる意見もあったが、あくまでも会誌の刊行にこだわりと矜持をもっていた役員の多くはこれを斥け、休会が決まった（昭和19年7月10日号）。

会誌は、通巻188冊として昭和19年7月に刊行されたものが最後となった。最後の例会を9月26日、上野公園不忍池畔無極亭にて開催すると予告している。題は「集古会物故会員遺作品並に集古会に関する資料」。会の終幕にふさわしからう。「但当日警戒警報発令の際は中止」と時局を反映した注意書きも添えられていたが、無事おこなわれたかどうかはわからない。当時はサイパン島が陥落し、東京では空襲の本格化が懸念されつつあった。かくして、集古会は49年におよぶ歩みをとめた。東京大空襲の影響もあったのであろうか。戦後、ふたたび活動が再開されることとはなかった。

2. 近代日本考古学と集古会

2.1 「史学考古学」の増進

同時代の考古学者に評価されたにもかかわらず、その後の学史研究のなかで忘れ去られた集古会の活動の概略を、当時の記録をもとに素描した。集古会がきわめて近代的な組織を採用して運営していた一方、近世以来の知的伝統に由来する場の創出をつよく志向していた二面性が明らかになった。西洋の近代科学が明治期に導入され、定着していったにもかかわらず、専門家や非専門家の別なく集い、談義する伝統的な場はなお保たれており、しかもそれは看過し得ない規模を保ち

続けていたのであった。

つぎに焦点となるのは、集古会の活動が近代の日本考古学のなかでどのように位置づけられるのかという問題だ。彼らが例会や会誌でとりあげて議論した内容が、アカデミズムとしての考古学研究とどのような距離関係にあったのかを検討する。

彼らの構想を知る重要な手がかりとなるのが、『集古』の表紙裏にしばしば掲載された規約だ。ここでは、会の目的に関する文言にとくに注目してみよう。創刊号（明治 29 年 11 月 30 日号）では、「談笑娯楽の間に古物に関する知識を増進」させることが目的と述べられている。冒頭で紹介した八木の回顧ともよく符合するが、この文言は会の歴史のなかでしばしば修正されている。明治 31 年 4 月 20 日号には、「談笑娯楽の間に考古歴史に関する古器物類を蒐集し互に智識を増進する」と変更され、明治 32 年 12 月 30 日号では「談笑娯楽の間に考古に関する器物及書画等を蒐集展覧し互に其の智識を交換する」となった。創立から数年の間に、彼らは自らが持ち寄るモノを単なる「古物」、古きモノから、「考古」のためのモノへというように、その認識を深化させたことがわかる。

みじかい休刊期間をはさんだ後の大正 9 年 2 月号になると、この文言はさらに踏み込んだ表現へと変更された。「談笑の間に史学考古学の智識を交換する」という改変である。考古学・人類学者の会員の相対的減少とは対照的に、彼らはモノを持ち寄り、鑑賞・品評することの目的を明確に「史学考古学」のためだと位置づけるようになっていったのである。

「史学考古学」とは大正期以降、『集古』誌上でしばしばみられたフレーズであった¹²⁾。これは考古学界ではほとんど使われておらず、そのため一般的な意味での歴史学と考古学をさすのか、それとも歴史考古学（歴史時代を研究対象とする考古学）をさすのかはわからない。いずれにせよ、ひとつ確実にいえることは、「古物」から「考古」、そして「史学考古学」へという認識の転換とは、集古会の人々が自らの活動をより「学」的なものへと位置づけていったことの象徴だということである。

持ち寄られたモノを仲間同士で鑑賞し、懇談する営為は、江戸時代の好古趣味と変わることろはない。しかし、集古会はこれを例会として継続し、その成果を

会誌にまとめることにつよいこだわりをもち、かつそれが「史学考古学」の増進につながると信じていたのであった。ここにおいて、好古趣味と近代科学の導入によって勃興した考古学は確実に接続する。

2.2 モノとことばをつなぐ糸

彼らが古きモノへ注いだまなざしを知るために、まずは例会の題とその出品物をいくつか検討してみよう。前章すでに述べたように、発足まもない時期の例会は参加者のコレクションの披露にとどまり、明確なテーマ性はみられない。たとえば、第1回の例会では、石器や縄文土器、鉄鏃などの考古資料からはじまり、古錢や槍穂、暦本などが陳列された。一見してきわめて統一性のない構成である。しかし、八木のいう「元禄古物派」の人々が大量に入会すると、彼らの提案によってあらかじめ題が設定されるようになった（第18回以降）。

明治・大正期に開催された例会とその題を一覧にしたのが第1表である。これを見ると、最初の数年は「商標・看板」（第21回）や「冠帽・笠傘・古板籍」（第34回）、「古文書・古写本・古写経」（第40回）というように、現代では考古資料に含まれこそしないものの、材質や機能・用途にもとづいたといえるカテゴリがしばしばとりあげられた。

明治30年代末以降になると、題が著しく多様化する。季節や干支にまつわる器物という指定や、「天明古物」（第67回）や「千年以上のもの」（第81回）のような年代を指定した題があらわれるのである。はては「笑」（第70回）や「口に触れるもの」（第75回）のように、もはや具体的な指定とはいえず、判じ物に近い題まで出された。大正年間になると、「浅草、小石川に関するもの」（第95回）や「諸国名物土産品」（第129回）、「東海道」（第136回）などのように土地に関連した題に加え、「団扇扇子類」（第128回）や「度量衡に関するもの」（第133回）、「祭礼に関するもの」（第134回）、「杓うもの」（第152回）といった民俗や生活文化に密着した題が採用される傾向が顕著になった。

このように出題の幅が拡散した理由は、当初のカテゴリにもとづいた題が早々に出つくしてしまったからだと考えるのがもっとも現実的であろうが、注目すべき点は彼らはそれを逆手にとって、あらたな個性を前面に押し出したことである。

第1表 明治・大正期の集古会例会

回	年	月日	場所	題
1	明治29	1. 5.	韻松亭（上野公園大仏前）	
2	明治29	3. 8.	三宣亭（上野公園内）	
3	明治29	4. 26.	富岡方（神田仲町一丁目四番地）	
4	明治29	7. 4.	見晴亭（上野公園東照宮前）	
5	明治29	9. 26.	青柳亭（神田区仲町大時計向）	
6	明治29	11. 28.	青柳亭	
7	明治30	1. 5.	青柳亭	
8	明治30	3. 28.	青柳亭	
9	明治30	5. 16.	青柳亭	
10	明治30	7. 3.	見晴亭（上野公園東照宮前）	
11	明治30	9. 26.	青柳亭	
12	明治30	11. 6.	青柳亭	
13	明治31	1. 15.	青柳亭	
14	明治31	3. 26.	青柳亭	
15	明治31	5. 15.	青柳亭	
16	明治31	7. 10.	青柳亭	
17	明治31	9. 25.	富岡（神田区仲町一丁目四番地）	（元禄年間を中心とし、婦女子に関する物品）
18	明治31	11. 12.	青柳亭	扇面及盃
19	明治32	1. 14.	青柳亭	七福神に因めるもの
20	明治32	3. 11.	青柳亭	文房具
21	明治32	5月	（青柳亭）	商標・看板
22	明治32	7. 22.	（青柳亭）	古銅器
23	明治32	9. 9.	（青柳亭）	煙草具
24	明治32	11. 25.	（青柳亭）	暦
25	明治33	1. 13.	青柳亭	陶磁器・漆器
26	明治33	3. 10.	鶯亭（上野公園）	人形・扁額
27	明治33	5. 12.	青柳亭	棒類・遊戲品
28	明治33	9. 8.	青柳亭	印章・神仏像
29	明治33	11. 10.	青柳亭	地図・度量衡
30	明治34	1. 12.	青柳亭	古鏡・古鉢・袋叢
31	明治34	3. 9.	日本橋俱楽部（浜町）	有職物・楽器・女装・古瓦
32				
33	明治34	5. 11.	日本橋俱楽部	弓箭・籠
34	明治34	9. 14.	青柳亭	冠帽・笠傘・古板籍
35	明治34	11. 9.	青柳亭	金石銘・燈台
36	明治35	1. 11.	青柳亭	菅公に関する物・正月儀式の遊戯品附百人一首
37	明治35	3. 8.	青柳亭	雛人形と雛道具
38	明治35	5. 10.	青柳亭	甲冑武器・附兜人形菖蒲刀の種類
39	明治35	9. 13.	福田屋（外神田）	肖像・図巻物・古番付・古裂・古革
40	明治35	11. 8.	青柳亭	古文書・古写本・古写経

第1表 (つづき)

回	年	月日	場所	題
41	明治36	1. 10.	青柳亭	内外国遊戯品・式紙短冊扇面并尺牘
42	明治36	3. 14.	青柳亭	通貨に関するもの・元禄古物
43	明治36	5. 9.	青柳亭	古銅器・宿駅に関する物
44	明治36	9. 12.	福田屋	飲食器類・古法帖類
45	明治36	11月		石器具類・箱類
46	明治37	1. 9.	青柳亭	龍に関する物・諸祝儀品
47	明治37	3. 12.	福田屋	人形類・車両船舶に関する物
48	明治37	5. 14.	青柳亭	祭礼に関する物・手提並腰提物
49	明治37	9. 10.	青柳亭	維新前舶来物・出土古物
50	明治37	11. 12.	福田屋	明治古物・履物類
51	明治38	1. 14.	青柳亭	正月に関する物・鏡類
52	明治38	3. 11.	青柳亭	男女装飾品・徳利類
53	明治38	5. 13.	青柳亭	戦争並に勝負に関するもの・幼童に関するもの
54	明治38	9. 9.	青柳亭	彫刻物並に印刷術に関するもの・音楽に関するもの
55	明治38	11. 11.	青柳亭	模造古物・民間風俗に関するもの
56	明治39	1. 13.	青柳亭	馬に関するもの・高齢者に関するもの
57	明治39	3. 10.	青柳亭	春に関するもの・興行に関するもの
58	明治39	5. 12.	福田屋	夏に関するもの・紋章類
59	明治39	9. 15.	青柳亭	秋に関するもの・名所旧跡に関するもの
60	明治39	11. 10.	青柳亭	冬に関するもの・崎行者好事家に関するもの
61	明治40	1. 19.	青柳亭	羊に関するもの・酒に関するもの・鑑札切手類
62	明治40	3. 9.	青柳亭	顔面に関するもの・諸地方特産の玩具
63	明治40	5. 11.	青柳亭	印並に印に関するもの・筆を用いざる絵画
64	明治40	9. 21.	青柳亭	信仰に関するもの・旅行に関するもの
65	明治40	11. 11.	青柳亭	幕末古物・餅に関するもの
66	明治41	1. 11.	青柳亭	猿に関するもの・室内遊戯品
67	明治41	3. 14.	青柳亭	天明古物・集合に関するもの・疱瘡に関するもの
68	明治41	5. 9.	青柳亭	垂下するもの・遊戯品
69	明治41	9. 19.	青柳亭	首に関するもの・恋に関するもの
70	明治41	11. 14.	青柳亭	吹くもの叩くもの・笑
71	明治42	1. 9.	青柳亭	鳥に関するもの・寿
72	明治42	3. 13.	青柳亭	桜花に関するもの・徳川時代文芸上の参考品
73	明治42	5. 8.	青柳亭	富士に関するもの・雨に関するもの・台
74	明治42	9. 18.	福田屋	腰につくもの・夜に関するもの・変化物
75	明治42	11. 13.	青柳亭	紅葉に関するもの・口に触るるもの・迷信
76	明治43	1. 8.	青柳亭	犬に関するもの・最初のもの
77	明治43	3. 12.	青柳亭	対をなすもの・空を動くもの

第1表（つづき）

回	年 月 日	場所	題
78	明治43 5.14.	青柳亭	水に関するもの・報道に関するもの
79	明治43 9.17.	青柳亭	山に関するもの・彫刻したる書画
80	明治43 11.12.	青柳亭	火に関するもの・復讐に関するもの
81	明治44 1.14.	青柳亭	亥に関するもの・千年以上のもの・最小なるもの
82	明治44 3.11.	青柳亭	年号あるもの・記録せられたる書画器物
83	明治44 5.13.	青柳亭	手拭、風呂敷、袱紗類・行列に関するもの・専門以外の製作品
84	明治44 9.16.	青柳亭	袋類・御守りの玩具・維新前の銅板
85	明治44 11.11.	青柳亭	廻るもの・狐狸に関するもの・廃物利用品
86	明治45 1月		子に関するもの・歳末年始のもの・名物もの
87	明治45 3.9.	青柳亭	丸きもの・肖像
88	明治45 5.11.	青柳亭	欧洲の影響を受けたるもの・三角のもの
89	大正元 9.21.	青柳亭	肌に附くもの・麹町区日本橋区に関するもの
90	大正元 11.9.	青柳亭	車両船舶に関するもの・絵馬扁額類・麻布京橋に関するもの
91	大正2 1.11.	青柳亭	牛に関するもの・羽子板と鞠・芝区本郷区に関するもの
92	大正2 3.8.	青柳亭	武士に関するもの・寺子屋並に天神様に関するもの
93	大正2 5.12.	青柳亭	農業に関するもの・考古家好事家に関するもの・四谷、本所、深川に関するもの
94	大正2 9.20.	青柳亭	工業に関するもの・明治時代追憶品・牛込、下谷区に関するもの
95	大正2 11.8.	青柳亭	商業に関するもの・模造古物並偽造品・浅草、小石川に関するもの
96	大正3 1.10.	青柳亭	太陽に関するもの・虎に関するもの・加留多、寿語錄
97	大正3 3.14.	青柳亭	流行物・徽章類・魚貝類に関するもの
98	大正3 5.9.	青柳亭	沿革を示す物・輪と鉤・印に関するもの
99	大正3 9.19.	青柳亭	月・鳥、虫に関するもの・皿
100	大正3 11月	青柳亭	特色ある土俗品・湯屋床屋に関するもの・箱申に関するもの・加留多及百人一首・門戸に関するもの
126	大正9 1.10.	青柳亭	切支丹に関するもの・千年以上の物・外国玩
127	大正9 3.13.	福田屋	具
128	大正9 5.8.	梅川（上野公園）	団扇扇子類・木彫品・古人余技作品・会員余技製作品
129	大正9 9.19.	通信博物館	宿駅に関する物・諸国名物土産品・寛永以前の版本写本

第1表(つづき)

回	年	月日	場所	題
130	大正9	11.14.	華道池坊東京出張所(小石川牛天 神下)	蜀山人関係品・鈴鐸類・諸祝儀品
131	大正10	1.15.	華道池坊出張所	鶴に因るもの・忠孝義烈・紙と紙製品
132	大正10	3.5.	華道池坊出張所	遊里に関するもの・竹細工品
133	大正10	5.28.	華道池坊出張所	御影額掛に関するもの・度量衡に関するもの
134	大正10	9.24.	華道池坊出張所	公卿大名に関するもの・祭礼に関するもの
134	大正10	11.12.	華道池坊出張所	金銀融通に関するもの・建築に関するもの
135	大正11	1.21.	華道池坊出張所	犬に関するもの・鶴亀・近畿に関するもの
136	大正11	3.11.	華道池坊出張所	不可解の珍物・東海道・飲食
137	大正11	5.13.	櫻川俱楽部(京橋具足町)	東山北陸両道・河海に関するもの
138	大正11	9.23.	華道池坊出張所	山陰山陽両道・手足に関するもの
139	大正11	11.11.	華道池坊出張所	南海西海両道・幕末維新のもの
140	大正12	1.13.	華道池坊出張所	亥・壳品の容器・古人和歌短冊
141	大正12	3.10.	華道池坊出張所	人の形・篆字のある物
142	大正12	5.12.	華道池坊出張所	外国文字ある古物
143	大正12	11.24.	西念寺(四谷)	
144	大正13	1.12.	西向天神社社務所(大久保)	甲子に関するもの・目出度きもの
145	大正13	3.15.	無極亭(上野公園池之端)	雛人形・桜花に関するもの
146	大正13	5.17.	無極亭	予言に関するもの・江戸を追憶するもの
147	大正13	9.20.	無極亭	姓名に関する物・辞書
148	大正13	11.15.	無極亭	米穀に関する物・文房器玩
149	大正14	1.18.	無極亭	丑に因めるもの・模様
150	大正14	3.14.	無極亭	夫婦に関するもの・大津絵
151	大正14	5.10.	無極亭	兄弟姉妹・煙草
152	大正14	9.19.	無極亭	祖先・杓うもの・柳亭種彦
153	大正14	11.15.	無極亭	親子・麵類
154	大正15	1.9.	無極亭	寅に因むもの・袋類・年中行事
155	大正15	3.14.	無極亭	桜・猫
156	大正15	5.15.	無極亭	盃に関するもの・旅行に関するもの
157	大正15	9.19.	無極亭	教育に関するもの・抱一上人に関するもの
158	大正15	11.13.	無極亭	広告に関するもの・手に持つもの

凡例

会誌『集古』所収の例会報告記事より作成した。表内空欄は、会誌中に記載のないもの。

第32回は記載がない。前後の例会の日付から推測するに、数えまちがいであったと思われる。

第134回は二重に数えられている。

第143回は関東大震災直後で、臨時会として開催されたためか題は設けられなかった。

それは、あえて抽象的な題を設定することによって、参加者がどのようなモノを持参するのか、題と実際の陳列品とのズレや奇想天外さを楽しもうとする意図だ¹³⁾。明治末にひときわ頗著にみられる判じ物めいた題は、こうした意図をよく

あらわしている。

そして、生活文化や土地にまつわる題が増える大正年間の状況は、おそらく彼らのいう「史学考古学」の追究と無縁ではない。たとえば、「山陰山陽両道」（第138回）の題で集められたモノをみてゆくと、山陰・山陽道の名所を描いた絵、陶器や木器など沿道各地の特産品、各地で出土した文物や、人物にまつわる書簡や記録などが陳列された。まるで名物や名所旧跡、人物などにまつわるモノを通じてその場に山陰・山陽道の国々を現前させるかのような多様性である（大正11年10月25日号）。

このような姿勢は、もちろん土地にまつわる題に特有のものではない。いずれの題も具体的とはいがたいものばかりであり、端的なことばを手がかりに雑多なモノが集められるという構成は共通している。ひとつだけ例をあげよう。「顔面に関するもの」という題に応じて集められたモノは、能面や甲、古人の肖像画、役者絵からはじまり、人形や鏡、白粉の商標、はては伊万里焼まで出品された（明治40年[1907]11月5日号）。白粉の商標という出品物もいささか奇異に見えるが、伊万里焼の出品理由はさらにふるっている。伊万里焼の口縁部に施された朱の塗装を、俗に「口紅」と呼ぶからであった。「口紅」ということばを介して、「顔面」という題と何の関係もないかに見える伊万里焼が結びつくのである。

ことばによる題を先に与える方式が端的にしめすように、彼らが熱意を注いだのは、ことばから連想されるモノを集める行為であった。ここでは石器・土器・金属器といった材質的区分や、絵画・彫刻・典籍・考古といった資料の性質にもとづいた区分——これらはみな、明治時代になって考古学や古器旧物の保存といった概念があらたに導入された結果生まれたものである——はまったく顧慮されていない。彼らにとって、さまざまなモノをこのような区分にしたがって分類することは何ら重要な意味をもってはいなかった。むしろ、あることばを発端に連想ゲームのように次々とたぐり寄せられるモノの世界の輪郭を描くことこそが、彼らの唯一の関心事であったのだ。

2.3 『集古』にみるモノの記述

この推測は、会員たちが『集古』に寄せた論説やエッセイの分析からもうらづ

けられる。会誌に連載された「糸印譜」や「蔵書印譜」、「商牌譜」といった記事をみてみよう。「糸印譜」の場合、材質や鈕の形態、印影の細さといった点が記述され、その珍しさが論じられる。一方、「蔵書印譜」や「商牌譜」では、図とともに持ち主や店の紹介が簡潔に記された。糸印とは清から輸入される生糸についていた小型の銅印であり、商牌とは店の看板やロゴをいう。長い連載期間のなかでひたすらくり返されたのは、ある意味でモノに徹底的に即した記述である。現代の考古学のように、何かを語るためにモノを記述するのではなく、モノを語るという目的ただ1点のために記述されているのである。

論説も同様だ。たとえば、中山笑(共古)の「がんくび錢」では(明治39[1906]年12月23日号)、考察は寛政期の書物にみえる「雁首錢」ということばから出発する。江戸時代の書物にみえる用例を丹念に追いながら、これがキセルの雁首をたたきつぶしてつくった錢であることを考証し、金属製の円盤(実例)を「雁首錢」と断定する。また、法制学・地理学者であった郷岡良弼の「鳩杖考」では、鳩杖(木彫りの鳩を頭につけた杖)の文献考証がひたすらに展開される(明治39年3月9日号)。これは、古記録や典籍にみえる「鳩杖」ということばを、実際のモノへと結びつける作業だ。

彼らの作業は、現代の歴史学・考古学の眼からみると一抹の違和感を覚える。これらを学問的素材としてとりあげるとき、私たちは通常、一種の賄金であった雁首錢が当時の経済に与えた影響やその製作の背景を、鳩杖ならばその象徴的功能の解明を考究すべき課題と設定する。要するに、私たちの議論はモノを出発点としながらも、それがおかれていた世界を考えることを究極的な目的とするのである。しかしながら、彼らの論説はこのような視点をまったく欠いている。ただひたすらに、モノの実態をみきわめることに紙幅が費やされているのである。世界を構成するモノではなくて、モノそのものの世界だ。私たちがモノがおかれたコンテクストに目を向けるのに対し、彼らの記述の焦点は、周囲のコンテクストから切り離されたモノそのものにあった。その典型的な方法が、モノとことばをつなぐ糸の再発見にあったのである。古典籍の世界にあらわれるモノの名前は、その多くがすでに実物と断ち切られている。これをもう一度現実とつなぎなおすこと、この1点こそが彼らのモノ観のすべてであり、「史学考古学」の実体であっ

たのである。

2.4 近代歴史考古学の射程—集古会と考古学会

さいごに、明治 28 年 4 月に発足した考古学会（現在の日本考古学会）の活動と比較して、集古会のめざした「史学考古学」と当時の日本考古学の距離関係を考察する。考古学会は、坪井正五郎・三宅米吉・下村三四吉らが中心となって設立された日本初の考古学専門の学会である。各人がおこなった人類学的調査のなかで歴史上の遺跡・遺物に関するデータも蓄積されたので、これらを専門に公表したいというのが設立の背景で、会の運営の中心となったのは「博物館派」の人々であった〔八木 1935〕。初代会長に選ばれた三宅米吉（のち帝室博物館総長をつとめた）が書いたと思われる「考古学会設立趣意書」によれば、会の目的は「本邦歴世の風俗・制度・文物・技能を明らかにする」ことにある（『考古学会雑誌』第 1 編第 1 号、明治 29 年）。

彼らのめざした考古学の射程を考えるために、ふたつの論文に注目する。ひとつは坪井抄五郎が著した「考古学の真価」であり、もうひとつは小杉楓邨が著した「考古の名義」である〔坪井 1897、小杉 1897〕。というのも、これらにはきわめて対照的な「考古学」観が披瀝されているからである。

坪井は外国の書籍の引用から説き起こしながら、考古学を「古物古建設物遺跡等に関する実地研究を基礎として当時の事実を正確に推考するを務めとする學問なり」と定義する〔坪井 1897:3〕。議論の冒頭で先史・原史・有史の区分にふれていることからもわかるように、坪井の念頭にあったのは、「記録」（文献史料）と古物遺跡（考古資料）の緊張関係であった。前者を山水画、後者を風景写真にたとえて、坪井は考古資料から引き出される情報の客觀性を指摘し、「考古学の真価」を論じたのである。

現代的観点からみてもさほど違和感のない坪井の主張に対して¹⁴⁾、小杉の主張はかなり独特である。古典学者であった小杉は、「考」、「古」の字義的解釈から「考古」の本義を説明する。彼は、過去を「経緯法」的に考究すべしと主張する。この「経緯法」とは、江戸時代の国学者・今井似閑の著書『万葉緯』より着想を得たものという¹⁵⁾。小杉は、縦糸と横糸があつてはじめて織物ができるがよう

に、縦糸－史料は横糸－古物によって、縦糸－古物は横糸－当時の風俗によって相互に補われなければならないと説いた。

文献史料と考古資料の両方を念頭においている点で、両者の議論はその前提を共有している。しかしながら、各々の史資料の位置関係という点で、両者はまったく対照的である。坪井の議論は考古資料特有の特性を強調しているため、考古資料のみにもとづく議論も許容するのに対し、小杉の議論は文献史料と考古資料を相互依存的な位置関係に配置しており、考古資料単独で議論を組み立てる可能性をまったく視野に入れていない。縦糸と横糸のどちらかが欠けていては織物ができないとのおなじことである。この議論は、文献史料のない時代には成立し得ないものの、歴史時代をあつかう場合には一定の有効性が期待される。二重の考証を主張する小杉の考古学を、ここではかりに「文献学的」考古学と呼ぼう。前章までの議論をふりかえってみれば、この「文献学的」考古学の影響力は歴然である。集古会の人々が熱意を注いだ「史学考古学」の方法とは、まちがいなくこの思考に準拠したものである。したがって、学問的発想においても、集古会と考古学会は通底していることがわかるのである。

集古会と考古学会の「近さ」は、それぞれの会誌に掲載された文章を比較しても明白だ。第2表は、昭和18年3月に刊行された日本考古学会編『考古学雑誌総目録』より、日本歴史考古学に関する論説や各種報文を集計したものである。神道・仏教に関する論題が多い点、そして現代では中心的な分野である土器・陶磁器の研究が少ない点は戦前の歴史考古学の特徴であるが、とくに重視したいのは生活・娯楽に関する分野の研究動向である。ことに娯楽というカテゴリで一括される論題（能面、人形、玩具など）は、集古会で一貫してとりあげられてきたものでもあるが、これらに関する論説が『考古学雑誌』にも多く掲載されていることがわかる。とりわけ明治30年代～40年代に集中しているが、この時期はもちろん『集古』の刊行時期と重なる。つまり、集古会と考古学会は完全にすみ分けがなされたのではなく、とくに生活文化に関する議論において、両者の興味関心は共通していたのだ。

この時期の執筆者の多くは、集古会にも参加していた。そもそも考古学会設立の中心となった坪井・三宅・下村はいずれも集古会の会員であったし、集古会興

第2表 『考古学雑誌』に掲載された日本歴史考古学関連文献（明治29～昭和15年）

	総本数	うち論説数	考古学会雑誌 (明治29～33)	考古 (明治33)	考古界 (明治34～43)	考古学雑誌 (明治43～)	
						第1～10巻	第11～20巻
1. 概論	24	21	1	0	0	10(3)	13
2. 神道	66	31	7(5)	3(1)	14(9)	27(12)	0
3. 佛教	904	342	60(29)	21(18)	188(118)	237(168)	7(4)
4. 兵事	7	5	1	0	4(2)	1	180(68)
城柵	41	25	2(2)	0	5(2)	24(7)	7(5)
甲冑	26	11	5(1)	3(1)	8(8)	2(2)	4(2)
弓矢附柄	7	2	0	6(4)	0	0	0
刀槍	19	14	2	2	2(2)	8(1)	2(2)
盾	1	0	0	0	1(1)	0	0
鎧兜	1	0	0	0	1(1)	0	0
馬具	3	0	0	0	0	1(1)	0
保呂	1	0	0	0	0	2(2)	0
5. 生活	106	78	13(4)	1	35(13)	21(3)	0
服飾	1	1	0	0	1	0	1(1)
食物	8	7	1	1	1(1)	2	0
住居	15	7	2	0	3(2)	5(4)	3(2)
家什	69	32	1(1)	2(1)	12(6)	13(12)	12(6)
20	10	2	0	7(5)	7(2)	3(2)	1(1)
6. 娯楽	5	5	0	0	0	4	1
音楽	4	1	1	0	2(2)	1(1)	0
美術	18	15	0	0	11(1)	2(2)	3
能面	3	0	0	0	0	3(3)	0
人形	5	1	2(2)	1	1(1)	1(1)	0
玩具	1	0	1(1)	0	0	0	0
相撲	1	0	0	0	1(1)	0	0
茶道	7	5	2	1	1(1)	3(1)	0
香道	4	3	0	0	1	2	0
	13	9	1(1)	1	6(2)	2	0

7. 交通	輿車	4	0	0	0	0	0
	船舶	0	0	0	0	0	1
8. 経済	駕籠	1	0	0	1	0	0
	道路	2	0	0	0	1	0
9. 美術	貨幣	3	0	0	0	0	0
	銭画	71	28	8(3)	1(1)	23(8)	22(17)
10. 工芸	彫刻	1	1	0	0	0	0
	建築	2	25	6(1)	0	18(9)	14(8)
11. 記録	金工	20	14	2	1	5(3)	2(1)
	陶甕	29	13	4(4)	0	11(7)	4
12. 土俗	ガラス	13	7	0	0	4(3)	7(2)
	織	48	14	6(3)	4	9(8)	18(12)
13. 雜	装飾	8	7	1(1)	0	0	6
	金石文	7	5	0	0	0	1
14. 文書	棟札	10	6	2(1)	0	1	3
	碑	70	57	3(1)	1	2	2(2)
15. 古印	古印	101	30	1(1)	0	13(2)	33(6)
	典籍・文書	6	2	0	0	8(5)	36(33)
16. 行事	碑	9	3	2(1)	0	0	3(3)
	古印	15	5	2	1(1)	1(1)	0
17. 信仰	典籍・文書	60	19	10(7)	4(3)	35(24)	5(3)
	雜	4	0	0	0	2(2)	2(2)
18. 雜	行事	3	2	1	0	0	0
	信仰	25	13	1	0	1(1)	0
19. 合計	雜	15	7	1(1)	0	6(5)	17(7)
	合計	225	40	16(6)	3(3)	105(93)	35(26)
		2176	933			61(52)	5(5)

凡例
日本考古学会編『考古學雑誌総目録』(昭和18年刊行)より、日本歴史考古学に関する文章を集計した。
分類細目は同書の分類に準拠した。ただし、項目1・2は本文で言及しない都合上、細目ごとの表示を省略した。
表中括弧内の数字は、論説以外の種類の文章の数をさす。

後に一役買った清水晴風は『考古学雑誌』にも数本の論説を掲載していた。テーマも、執筆者も集古会と考古学会にさしたる相違はなかったのである。

『考古学雑誌』第11～20巻が刊行された大正から昭和期になると、『考古学雑誌』に掲載される歴史考古学の論文は、鏡や服飾、金石文に関するもののほかは大半が宗教考古学関連のものとなり、集古会のテーマと重なる文章はめだって少なくなる。この時期は集古会が「史学考古学」を標榜し、考古学界では京都帝国大学に日本ではじめて考古学教室が設置される（大正5年）など、アカデミズムとしての発展がみられた時期である。集古会と考古学会のすみ分けがすすんだのは、このような動向と無縁ではないだろう。しかしながら、それはメディアの分離が明確になっただけにすぎないことは、昭和12（1937）年に刊行された後藤守一『日本歴史考古学』をみれば明瞭である。初の歴史考古学に関する概説書であるこの書物において、記述の中心となっていたのは「物質的遺物を通して見た文化史」であり〔後藤 1937:1-2〕、この方針のもと、服飾、武装・武器、住宅・聚落、調度、錢貨、美術工芸、神社、仏教、墳墓といった項目がとりあげられた。後藤はそれぞのなかで器物の名所や沿革に紙幅を費やしているが、その姿勢は必ずしも集古会から離れてはいないのだ。

大正期に至り、集古会と考古学会がアマチュアとプロフェッショナルという、異なるふたつの立場を代表する存在となったことは事実である。しかしながら、彼らのめざした考古学はまったく別物だったわけではなく、多くの点で共通項が存在していた。集古会が参加者の愉楽として、考古学会が学術研究として追究するという相違はあれども、モノとことばの接続を重視し、相互に補完して理解を深める「文献学的」考古学のパラダイムは、こうした垣根を越えて戦前の歴史考古学をひろく覆っていたのであった¹⁶⁾。

おわりに

専門性という点で分節化されつつも、方法としては完全に分離してはいなかつた両者の微妙な距離関係が大きく変化するのは戦後であった。その最大の要因は集古会の消滅にあるが、戦後の歴史考古学が社会経済史的視点を導入し、「歴史学」的考古学を志向していったことも看過できない〔中井 2004・2005〕。

古きモノを社会や経済のなかで評価する試みとは、必然的にモノよりもそのコンテクストを重視する姿勢へとつながる。モノそのものではなくて、その向こう側にある世界を見るまなざしだ。現代の歴史考古学では、須恵器「杯 A」とか土師器「皿 B」、白磁「碗 IV 類」というように、器物を一定の基準に則した符丁に還元して呼称する。これはもちろん、型式学的方法にもとづいており、それ自体は否定し得ない重要性をもっているが、モノとことばの接続に飽くなき熱意を注いだ集古会の人々の眼からみれば、おそらく奇妙に映るはずだ。皿 A と名づけられたモノが、いにしえのどのようなことばに接続されるのか、現代の考古学はそこを保留して議論を構築しているからだ。これはある意味で、「文献学的」考古学の否定にほかならない。戦後の歴史考古学はすなわち、過去の決別から出発したのである。

坪井正五郎は、近世の古物趣味全般を「弄古、好古、尚古」と呼んでその旧弊を指摘しつつも、これらは容易に考古学へと単線的につながると述べた〔坪井 1902〕。坪井の表現を借りるならば、「古人を敬い上世を慕うの余り古代の遺物を珍重」した集古会の活動は、まちがいなく「尚古」の系譜を受け継いでいた。「集古」という活動に裏打ちされていたこの近世的な「尚古」の系譜は、由来の異なる「近代」と邂逅しつつも、それに吸収されることなく戦前まで連綿と生き続けていたのであった。

註

- 1) ただし、「古物学」なる呼称はその後定着することではなく、明治 20 年代ごろまでには「考古学」という呼称が代わりに使われるようになった。その経緯は定かではないが、「考古学」の初出は H・フォン・シーポルト（江戸後期のオランダ商館医・シーポルトの次男）によって著された『考古説略』という〔角田 1954〕。
- 2) 「大学派」の起源はモースの大森貝塚発掘にあると八木は述べているが〔八木 1935:9〕、坪井自身は、モースの影響を軽視、ないしは無視する屈折した態度をみせていた〔坂野 1997 など〕。
- 3) つづく同年 3 月に開催された第 2 回の例会で、集古会と改称した（『集古会誌』明治 29 年 11 月 20 日号）。
- 4) 佐藤は亀ヶ岡遺跡（亀ヶ岡式土器で知られる）の発掘をおこなった地質学者であ

- り、林・田中は明治 30（1897）年に刊行された『日本石器時代人民遺物発見地名表』を編んだ人類学・考古学者である。
- 5) 大正期以降、会の運営に加わった三村清三郎の回顧によれば、そもそもものきっかけは、「人類学会では堅過ぎるから、少しだけた集をしよう」という坪井の発案であったという（集古会編『千里相識』、昭和 10 年 9 月）。坪井は日本の人類学の創始者として知られているが、幼年より古物に深く傾倒していた〔坂野 2000〕。このような彼自身の嗜好も注目されるが、一方で人類学研究が古物研究に陥ることを警戒しており〔八木 1935〕、モノについて語る場を人類学会の外に求めようとした事情も、設立の背景にあったと考えられる。
 - 6) 集古会に集った人々の詳細については、山口昌男による評伝を参照されたい〔山口 1998・2001〕。山口はこれを「逸民たちのアカデミー」と名づけ、官学アカデミズムに回収されることなく生き続けた市井の知的交流を評価している。
 - 7) たとえば、清水晴風の本業は車宿（運送業）であったし、古書の収集家で、かつ料理研究家として明治 45（1912）年に『実用家庭支那料理法』を著した奥村繁次郎は焼芋屋・芋繁の主人であった。また、大正期以降、会の中心的存在として活躍した三村清三郎は竹屋を営んでいた。
 - 8) ただし、八木は清水をはじめとする好古家を「元禄古物派」、従来の人類学者たちを「考古派」と呼んで微妙に区別する態度をとっているし〔八木 1935〕、三村は両者の「対立」をほのめかしている（集古会編『千里相識』、昭和 10 [1935] 年 9 月 15 日）。実際に八木は後年、会から離れていった〔八木 1935〕。
 - 9) 根岸は創立当初には名がみえず、明治 30 年ごろより参加した。会長に推戴されたのは、彼が資産家で華族や富裕層との交際もあったという経済的・社会的理由によるようだ〔八木 1935〕。なお、根岸の没後は後任の会長はおかれることなく、会の運営は評議員・幹事の合議制となった。
 - 10) この時期は幹事の林若樹が一人で切り盛りしていたが、過重な事務のために会誌刊行が滞ったようだ。林は休会を提案したが、三村清三郎はこれに反対し、林の運営手法を日記のなかで批判している（『三村清三郎日記』大正 8 年 12 月 15 日条、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『演劇研究』第 26 号、2003 所収）。大正 9 年に評議員を新設して合議制をより強化したのは、このような状況への対策と推測される。
 - 11) 明治 42（1909）年には京都、大正 4（1915）年には大阪、昭和 10 年には金沢で地元有志によって会合が開催されたことが報じられている（明治 43 年 6 月 26 日号、大正 4 年 7 月 15 日号、昭和 10 年 10 月 15 日号）。
 - 12) 考古学界では、文字史料の有無や多寡によって先史・原史・歴史と区分する方法が

浸透しており、歴史時代の考古学は歴史考古学と呼ぶのが通例であった。明治31~32年に八木奘三郎は概説書『日本考古学』を著し、先史および原史時代の遺跡・遺物をとりあげた。そこでは歴史時代の資料を『歴史考古学』と題して刊行することが予告された（実際には未刊行）。

- 13) 実際、明治42年6月5日号に掲載された会告では、出品課題が出尽くしたので、「妙案奇題」を会員に募集している。このような路線の変更は意図的なものであったのである。
- 14) もちろん、理論的関心も高くなっている現代の日本考古学では、坪井の主張が額面通り受け入れられているわけではないが、遺跡遺物から過去を考察するという考え方そのものは、概説的な書物ではよく紹介されている。
- 15) 小杉の説明によれば、「万葉集を研究せんが為め、本篇を経とし、その同時、或はその前後の正史雜書など、何くれと編纂して、参考の料として、これを万葉縛」とした今井の研究法をさしている〔小杉 1897:10〕。
- 16) このような「文献学的」考古学への傾斜は歴史考古学特有のものではなく、皇国史観との衝突をおそれた日本考古学の全般的特徴だとみる意見もある。しかしながら、ここでは集古会をはじめとする日本歴史考古学が明治期より一貫してこのような視点を保持し続けたことを注目したい。歴史考古学、とくに集古会の「史学考古学」が、そもそも皇国史観へのコミットを意識していたのかすら疑わしい。

参考・引用文献

- 表 智之 (1997) 「<歴史>の読み出し／<歴史>の受肉化——<考証家>の19世紀」(「江戸の思想」編集委員会『江戸の思想』7、東京、ペリカン社、pp.72-92)
- 清野謙次 (1954) 『日本考古学・人類学史 上巻』、東京、岩波書店、総732頁
 _____ (1955) 『日本考古学・人類学史 下巻』、東京、岩波書店、総827頁
- 小杉楓邨 (1897) 「考古の名義」(考古学会『考古学会雑誌』第1編第7号、pp.7-11)
- 後藤守一 (1937) 『日本歴史考古学』、東京、四海書房、総713頁
- 齋藤 忠 (1974) 『日本考古学史』、東京、吉川弘文館、総349頁
- 坂野 徹 (1997) 「日本人類学の誕生——古物趣味と近代科学のあいだ——」(日本科学史学会『科学史研究』第38巻 [No.209]、pp.11-20)
 _____ (2000) 「好事家の政治学——坪井正五郎と明治期人類学の軌跡——」(岩波書店『思想』907、pp.162-184)
- 坪井正五郎 (1897) 「考古学の真価」(考古学会『考古学会雑誌』第1編第8号、pp.1-5)
 _____ (1902) 「序」(坪井正五郎校閲・八木奘三郎著『増訂日本考古学』、東京、嵩

山房、pp.1-3)

角田文衛（1954）『増補 古代学序説』、東京、山川出版社、総 577 頁

勅使河原彰（1995）『日本考古学の歩み』、東京、名著出版、総 275 頁

中井淳史（2004）「「歴史考古学」の見取り図：語る＜領域＞、語られぬ＜モノ＞」（大阪歴史学会考古部会報告、2004.2.13.）

_____（2005）「<亀裂>の克服、自己像の獲得——近世・近代の土器・陶磁器研究——」

（吉岡康暢先生古希記念論文集刊行会『陶磁器の社会史』、印刷中）

八木静山(奘三郎)（1935）「明治考古學史」(『ドルメン』第4巻第6号、東京、岡書院、pp.9-24)

山口昌男（1998）『知の自由人たち』、東京、日本放送出版協会、総 323 頁

_____（2001）『内田魯庵山脈 <失われた日本人>発掘』、東京、晶文社、総 597 頁

渡辺兼庸（1977）「『古物学』の底本」（日本考古学会『考古学雑誌』63-2、東京、pp.1-21）

〈キーワード〉集古会、考古学史、歴史考古学

The Tradition of Collecting Old Objects, the Descent of Treasuring Old Objects

—The Modernization of Japanese Historical Archaeology—

Atsushi NAKAI

In the history of Japanese archaeology, some epochs such as the excavation of the *Omori* shell mound and the establishment of the Tokyo anthropology society have been evaluated as the distinct modernization of Japanese Archaeology. The purpose of this paper is to rethink this gap between pre-modern and modern in Japanese archaeology by focusing on activities of 集古会 *Shuko-kai*.

集古会 *Shuko-kai* was established in 1896, by some anthropologists who belonged to the division of anthropology, Tokyo Imperial University. The major purpose of their society was in the exchange of knowledge concerning old objects, so members gathered up various old objects in regular meetings which held five times a year. This aim was resulted from an old intellectual tradition of 集古 collecting old objects in Edo period, but 集古会 *Shuko-kai* had modernized features such as a membership system, periodical publication of journals and so on. They consciously intended to present the results of their activities.

The members of 集古会 *Shuko-kai* in *Taisho* period, many of them were not professional archaeologists but dilettanti, had professed the their intellectual activities as 史学考古学 *Shigaku-koukogaku*, “history and archaeology” or “historical archaeology”. They were particular about the reconstructing connections between old objects and names and described old objects themselves. This is substance of their 史学考古学 *Shigaku-koukogaku*.

This style seemed to be strange from our contemporary view, but it was not strange in modern age. The activities of 考古学会 (日本考古学会) the Archaeological Society of Nippon, which is the first academic society of Archaeology in Japan, was in common with the activities of 集古会 *Shuko-kai*. In the Archaeological Society of Nippon, some archaeologists argued that historical records and ar-

chaeological remains needed to be complementary each other for historical verifying. This method was consistent with 史学考古学 *Shigaku-koukogaku* method which was argued by members of 集古会 *Shuko-kai*. So, beyond the boundaries between professional archaeologists (the Archaeological Society of Nippon) and amateur archaeologists or dilettanti (*Shuko-kai*), thus “philological archaeology” paradigm had existed in modern Japanese archaeology.

The breakup of 集古会 *Shuko-kai* was one of primary factors to cut off this paradigm. Many contemporary historical archaeologists tried to overcome “philological archaeology” and intend to construct “historiographical archaeology” by introducing new viewpoints such as socio-economical history. The descent of 尚古 treasuring old objects from pre-modern age, which was succeeded by members of 集古会 *Shuko-kai*, came to an end.